

映画で考える 戦争と平和 / 第1回

『1917 命をかけた伝令』授業ガイド

一人ひとりの命の重さ —— 「数字の向こうに、一人の人生がある。」

教員用・指導資料（対象：中学生以上）

🏠 本資料はAI（Claude / Anthropic）で作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家の監修ではありません。授業での使用可否・場面の選択・学年の適否は、担当の先生が最終判断してください。

1 授業の概要

テーマ	一人ひとりの命の重さ（「戦死者〇万人」という数字を、一人の人生として想像する）
教材映画	『1917 命をかけた伝令』（原題 1917／2019年・イギリス、アメリカ／監督・脚本：サム・メン德斯）
対象	中学生以上。映倫Gだが、戦場の遺体や負傷の描写があるため配慮が必要（下記参照）
時間	標準100分（50分×2）。上映119分。全編視聴・厳選クリップ・あらすじ紹介から選択
中心概念	第一次世界大戦と塹壕戦／数字と一人の命／敵も一人の人間／命令と良心
ねらい	戦争の被害を「数」ではなく「一人ひとりの人生」として捉え、命の重さを自分の言葉で説明できる
準備物	生徒用ワークシート（別PDF）／ヨーロッパの地図（西部戦線の位置）／筆記用具

2 内容への配慮（必ずお読みください）

⚠️ 戦場描写の扱い（重要）

本作は史実を背景にした戦争映画で、**戦場の遺体・負傷・死の場面**がくり返し登場します。日本の映倫はGですが、**緊張の強い場面が長く続く**ため、無配慮な全編上映は避けてください。

- 上映前に場面を確認し、**クリップ視聴**を基本にする。
- 物語は**史実をもとにした創作**であることを事前に伝える（登場人物は架空）。
- 家族の戦争体験や、身近な人の死に関わる経験を持つ生徒に配慮し、**発表は強制しない**。
- 戦闘場面の迫力を「カッコいい」と受け止めさせるのではなく、**失われる命**に目を向けさせる。

📄 レイティング・著作権について

- 日本の映倫はG。ただし配信版・ソフトにより表示が異なる場合があるため、使用予定の版をご確認ください。
- 授業での上映には教育機関向けの権利処理が必要になる場合があります。本教材の文章はすべてオリジナルで、ポスター・場面写真は使用していません。

3 第一次世界大戦と塹壕戦（予備知識）

塹壕戦とは

第一次世界大戦（1914～1918年）では、イギリス・フランスなどとドイツなどが、フランスやベルギーで向かい合いました。両軍は長い溝（塹壕）を掘って何年にもにらみ合い、**わずかな土地をめぐる多くの命が失われました**。

映画の背景にある出来事

1917年の春、ドイツ軍は守りやすい「ヒンデンプルク線」まで計画的に退却しました（アルベリッヒ作戦）。「敵が逃げた」と追いかけると、実は待ちぶせの罠かもしれない——映画はこの状況をもとにした**創作の物語**です。

💡 「ワンカット風」の撮影に注目

本作は、長回しで撮った映像を切れ目がわからないようにつなぎ、**全編がひと続きのカメラ**のように見える作りです。観客は兵士のそばを離れられず、休むことも逃げることもできません。この演出が何を伝えているかを考えさせると、映像の読み取りにもつながります。

数字を「一人の人」として見る4つの視点（板書用）

① 数の中の一人

「1600人」の中に、兄・友だち・誰かの子どもがいる。

② 敵も一人の人

出会うドイツ兵も、同じように若く、怖がっている。

③ 小さな優しさ

極限の中でも、人は人を助けようとする。

④ 命令と良心

命令に従うこと／命を守るために止めること。

🎯 この授業の到達目標

戦争の被害を「数」ではなく「一人ひとりの人生」として捉える視点を持ち、映画の具体的な場面を根拠に、命の重さを自分の言葉で説明できる。

4 100分授業の流れ（50分×2）

時間	ながれ	先生の動き・発問
0-10分	導入	教科書の「戦死者〇万人」という記述を示し、「この数字から何が思い浮かぶ？」と問う。
10-25分	背景	地図で西部戦線を確認し、塹壕戦・ヒンデンプルク線への退却を説明。物語は創作であることも伝える。
25-45分	映画を観る①	任務を命じられる場面～出発（クリップ）。「ずっと一緒に走る」カメラに注目させる。
45-50分	1時間目のまとめ	ここまでで気づいたことを一言メモ。
50-75分	映画を観る②	敵兵・廃墟の女性と赤ちゃん・伝令が届く場面など（クリップ推奨）。
75-90分	ワーク記入	ワークシート「一人の人として見る」に記入。数字と一人の命を結びつける。
90-100分	共有・まとめ	板書「数字の向こうに、一人の人生がある。」で締める。

🌱 まとめ

戦争の記録は、どうしても「数」になります。でも、その一つひとつに名前と家族と帰りたい場所がありました。数字の向こうに一人の人を想像すること——それが、戦争を「遠い昔の出来事」にしないための第一歩です。

5 映画の背景知識

原題／邦題	1917 / 1917 命をかけた伝令
製作年・国	2019年・イギリス、アメリカ。上映119分。日本公開：2020年。映倫：G
監督・脚本	サム・メンデス（『アメリカン・ビューティー』でアカデミー監督賞）
受賞	アカデミー賞 撮影賞・視覚効果賞・録音賞の3部門（撮影監督：ロジャー・ディーキンス）
着想	第一次世界大戦で伝令をしていた監督の祖父から聞いた話がきっかけ。物語と人物は創作

主なキャストと役柄

- ・ ジョージ・マッケイ（スコフィールド役）：任務に気が進まないまま走り出し、旅の中で変わっていく兵士。
- ・ ディーン＝チャールズ・チャップマン（ブレイク役）：兄を助けたい一心で任務を引き受ける若者。
- ・ コリン・ファース／ベネディクト・カンバーバッチ：短い場面で上官を演じる。「主役は名もない若い兵士」という作り。

🔦 監督の祖父の話

監督の祖父アルフレッド・メンデスは、のちに作家になった人物です。監督は子どものころに聞いた祖父の戦争の話を長く心に残しており、映画の最後には祖父にささげる言葉が出てきます。「語り継ぐこと」の意味を扱う導入にも使えます。

※上記の事実は公開情報（映画.com、Wikipedia、MOVIE WALKER PRESS等）をもとにしています。細部・脚色には諸説あるため、授業前に必要に応じてご確認ください。

6 発問例・見取りのポイント

Q. 「1600人」と「目の前の一人」。どちらも大切なとき、人はどう選べばいい？

→ 正解を決めず、「数」と「一人」をどちらも軽く扱わない考え方を引き出す。

Q. なぜ監督は、場面を切りかえずに「ずっと一緒に」撮ることを選んだのだろう？

→ 観客を兵士のそばに置き、休めない・逃げられない感覚を共有させる演出だと気づかせる。

Q. 途中で出会うドイツ兵は、どのように描かれていた？

→ 「敵」も若く、怖がっている一人の人間として描かれている点に注目させる。

ワークシートの見取り（評価の観点）

- ・ 戦争の被害を「数」ではなく、具体的な場面を根拠に「一人の人」として捉えられているか。
- ・ 敵・味方を問わず、登場人物を一人の人間として見る視点を持てているか。
- ・ スコフィールドの変化など、映画の具体的な描写にもとづいて書けているか。
- ・ 意見の発表は強制せず、書いた内容を尊重する（家族の戦争体験などに触れる生徒への配慮）。

7 シリーズ全体像

回	映画	テーマ	目安
1	1917 命をかけた伝令	一人ひとりの命の重さ	中学生～
2	西部戦線異状なし	戦争を美化しない目	高校生～
3	ダンケルク	生きて帰るという勇気	中学生～
4	シンドラーのリスト	一人の選択が命を救う	高校生～
5	硫黄島からの手紙	敵にも家族がいる	中学生～
6	ガンジー	暴力を使わずに社会を変える	中学生～
7	ブリッジ・オブ・スパイ	対話と交渉で争いを止める	中学生～
8	ホテル・ルワンダ	見捨てない勇気	中学生～

8 参考資料（主な出典）

1917 命をかけた伝令 作品情報（映画.com） <https://eiga.com/>

Wikipedia「1917 命をかけた伝令」 https://ja.wikipedia.org/wiki/1917_命をかけた伝令

1917 命をかけた伝令 作品情報（MOVIE WALKER PRESS） <https://press.moviewalker.jp/mv69483/>

作品：映画『1917 命をかけた伝令』（2019年、監督サム・メン德斯）

© 2026 FilmEdu AI / 本資料はAIを活用して作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家による監修ではありません。授業での使用可否・場面選択・学年の適否は担当教員の判断によります。作品の著作権は各権利者に帰属します。授業での上映には適切な権利処理（教育機関向けライセンス等）が必要になる場合があります。内容の誤りにお気づきの際はお問い合わせよりご連絡ください。